特別寄稿2

古き良き時代の研究所

名誉教授
吉原 英樹

米国に留学

1966年から2005年まで39年間、この研究所におりました。神戸大学には、経営学部4年間、それから修士２年間、これらを足しますと45年間お世話になったことになります。この研究所に採用してくださったのは、井上忠勝先生でした。井上先生との出会いは、大学院の外書講読で、チャンドラーのStrategy and Structure を勉強したことからです。

1970年末から72年春までのほぼ1年半は米国に留学し、最初はピッツバーグのカーネギーメロン大学の経営大学院、その後半年間、ナッシュビルのヴァンダービルト大学の経営大学院に在籍しました。

カーネギーメロンではサイモン先生の指導を受けました。毎週1回午前に1時間ほど会ってもらっていました。サイモン先生があるとき、「吉原さん、あなたはどのように思いますか」と聞かれたのです。しかし、わたくしは答えられなかった。というのは、サイモン先生の本や論文は勉強していましたが、自分で研究をしていなかったからです。

ヴァンダービルトでは、アンソフ先生が、夕方、ビールやコーヒーを飲んで若手教員や学生と談笑していたときに、「この吉原はおもしろい。私のことを私以上によく知っている」と紹介していました。それはわたくしがアンソフ先生の本とか論文を読んでいたからでしょう。

サイモンとアンソフ両先生のこの2つの経験から、文献研究はダメだと思いました。日本の会社、日本の経営を調べて分析しないといけないと思ったわけです。

サイモン先生は、1978年にノーベル経済学賞をもらいます。このように偉い先生に指導をうけるようになった経緯をお話しましょう。68年ごろ、大阪の天満橋のホテルで、サイモン先生の講演がありました。講演後、先生のところに行って自己紹介をし、「あなたのところで勉強したい」といったのです。先生は、「私に手紙を書きなさい」といわれましたので、手紙を書きました。サイモン先生から、「あなたのことはわかりました、ディーンのサイアートは了承している、この手紙をformal invitation letterとして使ってよろしい」との返事がきたのです。

国際化

わたくしが研究所長のときに、外国人の教員を採用しました。スティーブン・ホワイト、デイビッド・メッセイ、ジェフリー・ファンク、シカンダー・カーンと、比較的短期の人として、クリストファー・バートレット、ロジャー・ストレンジ、李種永などです。かれらが、学会に出席するために出張の手続きをするとき、書類などは日本語オンリーです。図書の貸し出しをするために図書係に行くと、ここでも日本語オンリーです。庶務や図書のひとは、外国人の先生への対応で苦労したと思います。しかし、わたくしは、この苦労は研究所の国際化にきっと役立つと思っていました。「内なる国際化」、です。

国際化という点では、研究会がありました。

韓国の慶北大学校との研究会を1991年ごろから約10年間、大邱と神戸で交互に行い、日韓からそれぞれ10人、合計20人ほどが参加しました。研究会は英語でした。英語は、日本人にも韓国人にも外国語です。その英語でペーパーを書き、報告して、質疑応答するのです。わたくしたち日本人研究者は、貴重な国際経験をしたと思っています。研究所の小島健司さんと慶北大学校の李種永先生がこの研究会の中心メンバーでした。

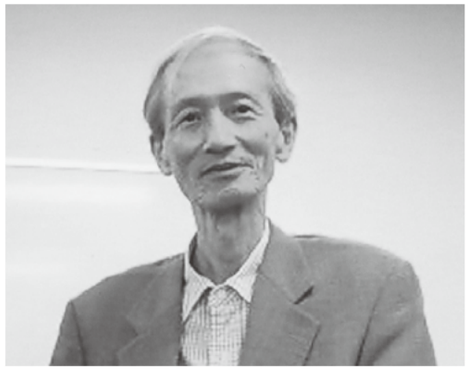
江崎グリコ国際経営セミナーは、91年ごろから、ほぼ毎月この研究所でやっていました。外国人の報告者は、ウラジミール・プーチック、パトリシア・ロビンソン、ミカエル・クスマノ、ジェフリー・ジョーンズ、エレノア・ウエスティンなどです。日本人は、藤本隆宏、沼上幹、米倉誠一郎、新宅純二郎、楠木建、國領二郎、長谷川三千子、原洋之介、深川由起子等々です。第一人者、実力者、新進気鋭の若手などにきてもらうことができました。当時はセミナーがめずらしかったようです。報告者には神戸までの交通費、謝礼（1万円か2万円）、食事代（夕食会）をだしました。

自由な楽園

研究所の先生は、自分のしたいことをする、したくないことはしません。研究所は基本的に個人主義で、研究所全体として仕事をすることはあまりありません。研究所の組織としての成果で注目されていたのは、新聞記事の切り抜き、特に戦前のもの、社史の収集、企業系譜図くらいでしょうか。自由な研究環境にくわえて、予算には余裕があったようでして、12月の教授会で、出張旅費を追加で請求してくださいといわれたものです。

仕事始めの1月4日、研究助成掛の女性は着物姿でした。事務長以下、みんなでお酒を飲んでいました。そのほか、中庭でのバーベキュー（シュラスコ）、輪投げ大会、しだれ桜のもとでの宴会、それに忘年会のことを、いまでもよく覚えています。

なお、わたくしは1994年から定年退職まで10年ほど応援団（正式には応援団総部（応援団と吹奏楽部））の顧問をしていました。わたくしの後任者が西島章次（故人）さん、そして佐藤隆広さんです。応援団の顧問に研究所の先生が3名つづいているわけですが、わたくしは応援団の創立者の菅正徳（学部ゼミの2年先輩）さんに指名していただきました。わたくしは、



大学祭に毎年、息子と娘をつれて参加して、応援団の店でおでんとお酒をたのしんでいました。その様子を菅さんは注目されていたとのことです。

サヨナラダケガ人生ダ

いいかげんだった、おおらかだった、これがわたくしの研究所の思い出です。

わたくしの採用の面接のとき、佐々木誠治先生が、「吉原、野球はどこのファンや」と聞かれたので、「阪神タイガースです」と答えると、「よし入れたるわ」とおっしゃったのです。

わたくしの研究所での最後の忘年会において、また、経営学部の最終講義のときには、出席者全員で六甲颪をうたいました。そして、わたくしは、井伏鱒二の「サヨナラダケガ人生ダ」を読みました。コノサカヅキヲ受ケテクレ　ドウゾナミナミツガシテオクレ
ハナニアラシノタトヘモアルゾ　「サヨナラ」ダケガ人生ダ

まさに、古き良き時代でした。